

公開特許公報

特 許 公 報 (A)

昭和50年8月12日

特許庁長官 斎藤英雄 殿

1 発明の名称

マウリ センテチン
N⁴-アシルシチジン誘導体の選択的脱N-アシル化法

2 発明者

テラフシ セン
住 所 東京都調布市築町2-16-16
氏 名 石 戸 良 浩 (ほか1名)

3 特許出願人

郵便番号 104
住 所 東京都中央区京橋1丁目6番地
電話番号 東京(03)272-1111番(代表)
名 称 (006) 味の素株式会社
代表者 取締役社長 藤 辺 文 蔵



①特開昭 52-23085

④公開日 昭52.(1977) 2.21

②特願昭 50-97860

②出願日 昭50.(1975) 8.12

審査請求 未請求 (全3頁)

庁内整理番号

6855 44

⑤日本分類

16 E461

⑤Int. Cl²

C07H 19/06

50 097860

明 細 書

1 発明の名称

N⁴-アシルシチジン誘導体の選択的脱N-アシル化法

2 特許請求の範囲

N⁴-アシルシチジン誘導体をアルコール中で加熱することを特徴とするN⁴-アシルシチジン誘導体の選択的脱N-アシル化法。

3 発明の詳細な説明

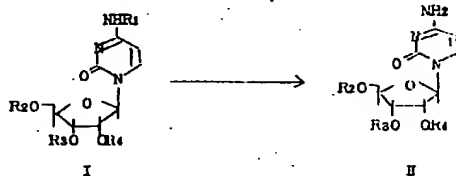
本発明はアルコール中でN⁴-アシルシチジン誘導体を加熱し、選択的にN⁴-位のアシル基を除く方法に関するものである。

塩基部分にアミノ基を有するヌクレオシド、例えばアデノシン及びグアノシンはビリジン中無水酢酸との反応により2'3'5'-トリ-O-アセチルアデノシン及び2'3'5'-トリ-O-アセチलगアノシン〔ブレデレック等「ヘミッシュ・ペリヒテ」第80巻第401頁、1947年〕が得られる。このようにアデノシン及びグアノシンの場合には、塩基部分のアミノ基はそのまゝにして糖部分の水

酸基のみをアシル化することが可能であるが、シチジンの場合にはアミノ基の塩基性が強く(pKa 4.6)、従つて酸無水物との反応で糖部分の水酸基のみをアシル化することは極めて難しく、アミノ基に優先的にアシル化がはこる。

本発明者は、シチジンの塩基部分がアシル化され、糖部分のうち少なくとも一個の水酸基がアシル化された誘導体をアルコールの存在下で加熱することにより、極めて簡単にかつ好収率で目的とする脱N-アシル化し得ることを見出し、本発明を完成した。

本発明の出発物質に用いられる誘導体の代表的なものは一般式Iで示される。



(但し R₁, R₂ はアシル基、R₃, R₄ はアシル基、アルキデン基、アルコキシメチル基等)。

本発明によれば、N⁴-アシルシチジン誘導体のN⁴-位に結合しているアシル基のみを選択的にはずすことができる。

本発明で得られる脱N⁴-アシル化体はシチジンの塩基部分を化学修飾するのに有利な化合物で、医薬品例えば抗ウイルス剤、抗ガン剤等の合成中間体として極めて重要である。

本発明反応の出発化合物であるN⁴-アシルシチジン誘導体のアシル基としては例えばアセチル基、プロピオニル基、n-ブチリル基、イソブチリル基、n-パレリル基、イソパレリル基、n-カプロイル基、カプリル基、ステアロイル基等の脂肪族アシル基の他に、ベンゾイル基、ナフトイル基等の芳香族アシル基が使用される。

本反応で用いられるアルコールは、特に制限はなくアルコール例えばメタノール、エタノール、プロパノール、ブタノール、セロソルブ等例えばメチルセロソルブ、エチルセロソルブ、ジオール類例えばエチレングリコール、プロピレングリコール、2,3-ブチレングリコール、フェノール類、

-3-

率は通常70%以上95%程度である。

以下実施例により説明する。

実施例1

N⁴-2,3,5-テトラベンゾイルシチジン3.35g (5ミリモル)をメチルセロソルブ100mlに加え、24時間加熱還流する。反応後減圧下で溶媒を留去し残渣をシリカゲルカラム〔25gのシリカゲルを充填、溶出溶媒はクロロホルム-メタノール(96:4, v/v)〕で分離すると、2',3',5'-トリ-0-ベンゾイルシチジンのフラクションが得られる。上記生成物を含む溶離液を濃縮し、残渣にメタノールを加えるとゲル化する。これを石油エーテルで数回洗浄して2.56g (収率92%)の粉末を得る。これをエタノールから再結晶して純品を得る。この化合物の元素分析値は次の通りで、2',3',5'-トリ-0-ベンゾイルシチジンの実験式を満足する。

1 元素分析

	C%	H%	N%
元素分析値	63.71	4.63	7.42
計算値(C ₂₀ H ₁₈ N ₃ O ₆ ・½H ₂ O)	63.92	4.61	7.39

-5-

ナフトール類及びこれら誘導体が例としてあげられる。

本反応の加熱のための温度は、50℃以上200℃程度で撹拌しながら行なわれるが、好ましくは130℃~150℃で加熱溶融するのが好色、分解しない点で良い。低沸点のアルコールを使用した場合には、本反応は例えばオートクレーブ中で行なうとよい。

反応時間は、反応条件特に反応温度によつて一定でないが、通常30分以上50時間程度を要する。

さらに上記反応系に触媒としてイミダゾール、ピリジン等の含窒素異項環化合物を添加することにより、反応を促進させることができる。

このようにして生成した目的物を単離するには、シリカゲルカラムクロマトが採用される。適当な有機溶媒で溶離して得られた粗結晶を再結晶により精製して純品を得ることができ、元素分析値、NMR、UVスペクトル等から予想される構造式及び性質を満足するものである。目的物の単離収

-4-

2 融点 183-184℃

3 紫外吸収極大

$\lambda_{\text{max}}^{\text{EtOH}}$ nm(s): 230.5 (51200), 265-275 (13900)

実施例2

実施例1の方法に準じてメチルセロソルブの代りにエチレングリコールを用い、N⁴-2,3,5-テトラベンゾイルシチジン(3.35g, 5ミリモル)を反応温度130-135℃で20時間反応させる。次いでシリカゲルカラムで分離精製して、2',3',5'-トリ-0-ベンゾイルシチジン2.47g (収率89%)を得る。このものの物理的・化学的性質は、実施例1で得られるもののそれらと完全に一致している。

実施例3

N⁴-アセチル-2',3',5'-トリ-0-ベンゾイルシチジン(2.99g, 5ミリモル)を2,3-ブチレングリコール15mlに加え、反応温度130-135℃で20時間撹拌する。反応液を実施例1

-6-

と同一の方法に従つてシリカゲルカラムにかけ、
2'3'5'-トリ-0-ペンゾイルシチジンを得る。
収量2.42g。収率87%。この結晶の物理化学
的性質は、実施例1で得られるもののそれらと完
全に一致している。

4 添付書類の目録

- | | |
|----------|-----|
| (1) 明細書 | 1 通 |
| (2) 図表図本 | 1 通 |

5 前記以外の発明者

住所 ^{ヒガシタルノシナイワザロウ} 東京都東久留米市幸町1-5-8
氏名 ^{ナカノノブオ} 中 崎 隆 男

以上

特許出願人 味の素株式会社